

● シリーズ 私の見た日本 Vol.164

住空間に見え隠れする異文化にまつわる話

全 勝(ジュン・スン)

大韓民国ソウル生まれ。慶應義塾大学環境情報学部環境デザインコース卒業後、スウェーデン、ストックホルムの王立美術工芸大学室内建築・家具デザイン学科にて修士号を取得し、設計事務所等で実務経験を積む。2014年光井純&アソシエーツ建築設計事務所に入社。現在同社インテリアデザイン室所属。



私は現在、東京にある光井純&アソシエーツ建築設計事務所インテリアデザイナーとして働いている。現職に就くために2014年来日して早4年目になるが、これまでこの事務所で携わってきたプロジェクトは商業施設から集合住宅の共用部、空港のラウンジに至るまで多岐に渡っており、プロジェクトの数だけデザインの切り口も様々で刺激のある毎日を送っている。

職業柄が初めて訪れる場所に行くと、その空間の特徴がまず目に入ってくる。そこに今まで見たことのない特徴を見つけてその理由を自分なりに考えることは、仕事の上でためになるという利点もあるが、純粋に面白い。とりわけ、住空間の違いは生活スタイルやその国の文化の違いに直結することが多いので、非常に興味深いテーマである。

ソウル、東京、ヘルシンキ、ストックホルム…これらの街に私は暮らしてきた。国から人種、文化や歴史に至るまですべてが異なる街で生活をしながら感じたことや考えたことを、今回は住空間というテーマで展開してみようと思う。

韓国のソウルで生まれた私は、80年代後半に両親の仕事の関係で家族とともに東京に移り住むことになった。それから大学を卒業するまで、我が家は4年ごとに東京とソウルで暮らすことになる。家族と東京に住む際は、場所と広さは違えど、いずれも23区内にある駅近のマンションだった。いわゆる〇LDKという間取りのマンションである。このタイプの家に住み始めて面白かったのは、以下の点である。

居住空間について

まず1つ目は多くの場合で和室があるということ。床にはイグサで作られた畳が敷き詰められ、それは木の敷居と襖で区切られた日本の住空間ならではのものである。床の間や押入れなど子どもにとっては魅力的な要素が盛り沢山な空間であった。今でも目を閉じ

ると、当時住んでいた家の畳の香りと和紙でできた天井照明から漏れるやわらかい光が脳裏に浮かんでくる。このような日本固有の文化である和室が現代の住空間に残っているのは素晴らしいことであると思う。一方で、最近の集合住宅では和室を作らない間取りも増えているそうだが、是非無くならないでほしいと思っている。

水廻りの空間もまた特徴的で、トイレと風呂場が分かれており、日本人からするとごく当たり前のことかもしれないが、トイレは大抵奥行と間口とも1m弱くらいのコンパクトな空間だった。しかしちゃんと手を洗う小さい洗面器がついていた(ついてないトイレもあったが)。そして脱衣スペースから入る風呂場の内部はユニットバスになっており、浴槽には追い焚き機能がついていた。この追い焚き機能は優れたもので、ほかの国ではいまだ拝見したことがない。実は日本が誇る機能で、是非国際化してほしい機能だと個人的に思っているくらいだ。

対して、スウェーデンの集合住宅の場合、トイレと風呂場は大抵1つの空間に収まっており、最近建てられた集合住宅だとバリアフリー法に対応するため、車椅子でも使用可能な仕様かつサイズで作られなければならない。これはすべての集合住宅に同様に適用されるため、一人暮らし用のスタジオアパート(いわゆるワンルームアパート)になるとトイレと居室がほぼ同じサイズになっている間取りも出てくる。これもまた、すべての人に平等に住みよい住空間を提供する北欧ならではの特徴ではないだろうか。

韓国の水廻り空間もスウェーデンと似ていてトイレと風呂場は通常分かれていない。だが最近は一戸に水廻りが2カ所以上設置されている場合が多く、2つ目からは風呂無しでトイレが単独であるケースもある(この場合の2カ所はリビングに風呂+トイレ、ベッドルームにトイレというように設置されていることが多い)。そして韓国の住宅で特徴的な

ところはオンドルという床暖房が水廻りにも施してあることである。これによって極寒の冬場でも水廻りは暖かい(韓国の冬は厳しく、零下まで気温が下がるのが普通である)。同様に、冬場の気温が零下まで下がるのが通常のスウェーデンでは、水廻りに温水パネルヒーターが設置してあり、これによって水廻りの空間の温度は一定に保たれる。

視点を変えて、フィンランドの住空間において、特に水廻りで面白いと思ったのは、集合住宅の共用部にサウナが設置されていた点である。さすがサウナ発祥の地、フィンランドらしいと感心したものだ。フィンランドのサウナは湿式でその温度と熱気のダブルパンチに最初は戸惑ったものの、フィンランドの極寒の冬を経験してからは、フィンランド式サウナはなんて素晴らしい文化なのだろうと考えるようになった。蛇足だがフィンランドではいたるところ個人住宅はもちろんのこと、大学のキャンパス内、海辺や湖畔一にサウナ小屋が設置されている。まるで日本では公衆トイレがいたる場所にあるように、フィンランドにはサウナがたくさんある。サウナは単純に体を温める場所ではなく、人々が思い思いに汗を流しながら他人とコミュニケーションする一種の社交場として暮らしに深く根付いている。

共用空間について

暮らしから考察した居住空間の違いとは視点を変え、今度は共用空間について考えてみたい。現職についてからいくつかの集合住宅の共用空間デザインに関わってきたと思う日本の集合住宅のもうひとつの大きな特徴が共用空間である(ここでは便宜上共用部と共用室を合わせて共用空間と呼んでいる。また、集合住宅入口、エントランス廻りの空間一風除室、エントランスホール、コンシェルジュ、ラウンジなどを共用部、その他のアメニティ施設ーゲストルーム、パーティールーム、スタディールームなどを共用室と

定義している)。ホテルライクで豪華なエントランス、有名デザイナーがデザインしたソファなどが並べてあるラウンジなどを備えている集合住宅は、共用空間イコールそのマンションに住む住民の生活レベルを象徴しているかのようである。

北欧の(といっても私が知っているのはスウェーデンとフィンランドの場合であるが)集合住宅にはこのようなステータスの象徴としての共用空間はないが、代わりに洗濯室という実用的で面白い空間が存在する。スウェーデンの集合住宅には昔から洗濯機が住戸に無い場合が多く、住民は地下あるいは1階にある洗濯室で共同で洗濯をする。洗濯室には大型洗濯機数台と乾燥機、シーツなどを干せる大型乾燥機などが設置されており、各々が予約をした時間に洗濯室を訪れて一週間分の洗濯をする。また、洗濯室には住

民同士のコミュニケーションのための掲示板も設置されていたりして単純に洗濯をするだけの空間ではなく、一種の集会室のような空間でもある。スウェーデンに滞在して日が浅かった頃はこの洗濯室システムに慣れなかったのが、今ではなつかしい。予約をするのを忘れて時間間違えてしまったこと以上に、使いたいときにすぐに使えないという不便さと、身につけた衣類を洗濯するというある意味プライベートな行為を他人と共有することに抵抗があった。一方で、日本に比べて気温も低く湿気が少ない、また空気が綺麗な北欧の環境では実際毎日洗濯機を使う必要はないのかもしれない。そうやって人と共有できるものは共有して、環境にやさしいことを実践するという精神もスウェーデンらしいと思う。

最近の韓国の集合住宅の場合、低層階に

はカフェやパン屋などの商業施設とマンションの住民のみが利用できる大浴場(韓国では沐浴と呼ぶ)付きのジムが入居するケースが多い。これはジムに通って健康を維持することを自己管理のひとつとして重要視する、韓国ならではの特徴ではないかと思う。

空間を形成する要素には様々な背景があり、文化という視点は空間を分析するひとつにしか過ぎない。空間の特徴を紐解く視点は、国や文化の違い、歴史や、人々の習慣など様々である。もう16年近く住んでいる日本であるけれども、ふと立ち止まってよく見てみると、見慣れた風景であっても日本ならではの固有な特徴が見えてくるのがいまだにある。こういったふとした気づきを大切に、物事を様々な視点から考えることで、引き出しを多く持つデザイナーとして日々努力していきたいと思っている。



左上/ストックホルムで最初に住んだマンションからの眺め。さほど市内から離れていないにもかかわらず大きな公園に面している 右上/ヘルシンキで滞在したアパートの中庭。1階にサウナがある 左下/真左下/冬にワークショップで訪れたフィスカルス村(フィンランド)。寒さをサウナとウッカで乗り切った 右下/ストックホルムで暮らしたマンションの地下には洗濯室があった (上4点提供/光井純&アソシエーツ建築設計事務所)